

各国で異なると考えられる人々の貯蓄行動が、資本の蓄積と国際的な貿易構造に及ぼす影響について、資産保有量の異なる複数の世代が、各国内に存在する 2 国モデルを用いて分析を行ったところ、以下のようなことが明らかになった。

時間選好率が低く貯蓄性向の高い人々が多い国は、貯蓄性向が低い国と比べて保有資産量が増加するが、国際的な資産市場が存在するもとでは、その資産は各国内の資本として蓄積される。そして長期的な均衡においては、貯蓄性向の高い国は、対外資産から得られる所得により、貯蓄性向の低い国よりも多くの財とサービスを消費することができるため、その厚生水準は高くなる。また、その均衡において、貯蓄性向の高い国は輸入超過のため貿易赤字を計上しているが、所得収支の黒字と相殺され経常収支は 0 となっている。

長期的な均衡における貿易構造については、貿易を行うことができない財やサービスが、貿易可能な財やサービスと比較して、労働を集約的に使用するかどうかで結果が異なるが、実証データにより確認されているように、非貿易財が労働集約的である場合には、貯蓄性向の高い国が資本集約的な財を輸入するという、古典的なモデルで得られた結果とは、正反対の結果が得られる。

これらの結果は、以下の図で端的に示すことができる。

図では、貯蓄性向の高い自国と低い外国の原点をそれぞれ  $O$  と  $O^*$  とし、 $OP_1$  と  $OC_1$  が自国による貿易財の生産量および消費量、 $OP_2$  と  $OC_2$  が自国の非貿易財の生産量および消費量を表しており、 $P$  点と  $C$  点が自国と外国の両財の生産点と消費点をそれぞれ表している。また  $K, L, V$  はそれぞれ長期的な均衡における自国内の資本量、労働量 (1 で固定)、自国家計が保有する資産量を表し、 $K^*, L^*, V^*$  は、外国に関する値である。

図において、 $OV$  が  $O^*V^*$  より長いことが、自国の保有資産量が外国より多いことを示し、 $OV$  が  $OK$  より長いことが、自国が外国の資本を対外資産として保有していることを表している。また、 $OC$  が  $O^*C$  よりも長いことが、自国の消費量が外国よりも多いことを、 $OC_1$  が  $OP_1$  よりも長いことが、自国が貿易財を輸入し貿易赤字となっていることを示している。

